



活動報告

がん患者を地域で支えるための支援者研修会

TKPガーデンシティ仙台 (AER30階)

本研修会は、宮城県内のがん患者支援に携わる医療・保健・福祉・介護関係者を対象に、「がん患者と家族を取り巻く現状とケアについて学び、そのうえで多機関・多職種協働の必要性を理解して、県内全域で多機関・多職種が協働しがん患者支援に取り組む一助となる」を目的として、3回シリーズで開催しました。各研修会の参加者数は110～140名で、多くの皆さまにご参加いただきました。

平成26年10月30日 2回目 がん患者の身体的・精神的ケアと緩和ケアを学ぶ

2回目は、東北大学病院緩和医療科長 特命教授 中保利通先生から『がん緩和ケアとがん患者・家族への支援』についてご講演いただきました。

講演では、「緩和ケアの定義に含まれるQOL」や「がんの痛みとせん妄診断のコツ」、「傾聴とコミュニケーション」と併せて、事例を交えて



「いのちのボタンタッチ」についてお話いただき、参加者からは「自分のケアを振り返ることができた」や「自分の生き方について考える機会になった」という感想を多くいただきました。

続けて、地域のがん患者支援活動に取り組む「ホッとサロンとめ」代表の鈴木玲子氏より『ホッとサロンとめの活動報告』をいただきました。鈴木さんはサバイバーの立場で、ピアとして地域に根ざした支援活動を継続されています。活動報告では、日頃の活動内容に併せて、患者支援の必要性についても報告いただき、参加者からは「がん患者の仲間による支えの大切さを理解できた」という感想が聞かれました。

平成26年12月4日 3回目 がん患者支援の多機関・多職種連携を学ぶ

3回目は、医療法人社団 爽秋会 岡部医院 院長 佐藤隆裕先生と東北大学大学院医学系研究科保健学専攻公衆衛生看護学分野 助教 田口敦子先生よりご講演いただきました。先生方には、参加者の要望として「具体的な事例を通して地域連携を学びたい」という声が多く聞かれたことをお伝えし、講演では具体例を多く交えてお話いただきました。

はじめに佐藤先生からは『在宅がん緩和ケアにおける多職種連携の実践』について、「がんの終末期の特徴と緩和ケアの定義」や「なぜ多職種連携が必要か?全人的苦痛(Total Pain)という捉え方」についてお話いただき、最後はいくつかの在宅での事例を通して多職種連携の必要性をお伝えいただきました。

続けて、田口先生からは『多職種連携のポイン



トと地域包括ケアシステムの構築を目指して』を演題に「地域包括ケアとは?」、「連携のポイントとは?」を踏まえ、「地域包括ケアの構築に向けてそれぞれができること」について登米市や宗像市の取り組みを実例にお話いただきました。

参加者からは「事例がより勉強になった」や「自分から少しずつ連携のつながりを作っていきたい」という感想をいただくことができました。

全3回のコースに出席した参加者の感想より

「さまざまな面からがん患者や地域との関わり方を学ぶことができた」、「仕事をしていて不安な部分もあり、大変参考になった」などの感想のほか、「講演会方式だけでなく、多職種が顔を合わせて話し合うグループワークを希望したい」という要望を数多くいただきました。今後もいただいたご意見やご要望を参考にして、支援者に役立つ研修会を企画・開催していきたいと思っております。

がんの患者と家族のための研修会 がんに振り回されないための患者力

平成26年11月1日 TKPガーデンシティ(AER30階)

本研修会は、がんの患者とその家族が主体的にがんに向き合い、積極的に治療や療養生活に取り組むことの大切さを学ぶ機会として開催しました。当日は135名の方にご参加いただき、その8割はがんの患者と家族の方々でした。

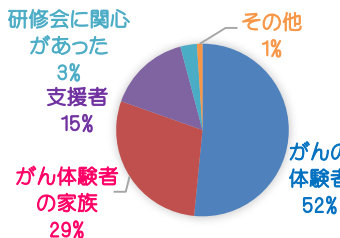
講師の押川勝太郎先生は、宮崎善仁会病院で医師として従事されるかたわら、NPO宮崎がん共同勉強会理事長として、がん患者の学習と患者同士の相互支援を後押しする活動を行われており、当日は「がんに振り回されないための患者力～実は患者さんたちにできる工夫はたくさんある」を演題にご講演いただきました。



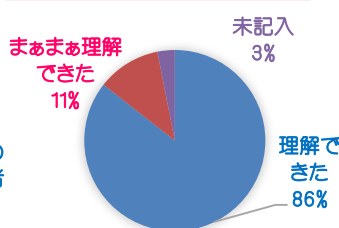
押川先生からは、「がん患者はみんなが体験できないことを体験した者として、人のつらさが分かるようになり人として格が上がる」や「長期目標と短期目標を組み合わせ、毎日を前向きに生活してほしい」などのメッセージをいただき、参加者の皆さんにとって大きな励みとなったようでした。

アンケートには、多くの方々がびっしりと感想を書いて下さり、「医師に自分の意見を伝えることの必要性を理解できた(患者)」,「がんに縛られている自分に気づいた(患者)」に加え、「前向きに生きたい(患者)」,「患者の主体性を支援したい(支援者)」などの前向きな感想を数多くいただきました。

参加者(135名)の状況



講演内容は理解できたか



アンケート 講演内容で学び得られたことや印象に残ったこと(自由記載) 抜粋

がんと闘っていくための患者力、なかなかありそうでなさそうな貴重な切り口からの講演で大変ためになりました。	がん体験者
長期目標を持つことはがん患者には無縁なことと思っていましたが、少し目の前が明るくなったような気がします。	がん体験者
私は医療従事者でもあり、がん体験者でもあるのですが、今まで参加した医療従事者向けの講習と違い、とても患者側に立った、とても励まされた研修会でした。	がん体験者 支援者
がんになったことを悲観的に思うのではなく、長い目で見て楽しく目標を持って生きていく、普段と変わらない生き方をしていけることを知ったことが大きかったです。希望をもって生きていこうと思いました。	家族
患者さんのがんに向き合う姿勢について具体的に聞くことができ、患者自身が行うべきことがあることが分かりました。患者さんがそれに気づける支援をしていきたいと思います。	支援者

平成26年度 第2回 宮城県がん患者会・サロン情報交換会

平成26年11月27日 TKPガーデンシティ仙台勾当台

今年度2回目となる宮城県がん患者・サロン情報交換会では、仙台青葉学院短期大学看護学科成人看護学分野 教授 根本良子先生をお招きし、「宮城県内のがん患者会・サロン活動に期待すること」について講話いただきました。根本先生は、平成21年に「宮城県がん患者支援の会(ホッとサロン)」の設立に携われ、現在も「ホッとサロンin仙台(名称

変更)」を継続して支援されています。講話では、「がん患者団体の力が国を動かし、がん対策基本法の制定に至った。患者の力は大きい」や「宮城県内の患者会・サロンの横のつながりの強化を期待している」というエールをいただきました。

続けて「宮城県内のこれからの患者会・サロンの横のつながりのあり方」について、今回で3回目となる話し合いを行いました。患者会・サロンがつながることによって、県内にどのような変化がもたらされ、患者会・サロンの活動がどのように進展していくかのイメージを参加者全員で共有することができました。次回来年3月の情報交換会まで、各患者会・サロンで話し合いを行ってもらい、結果を持ち寄って「横のつながりのあり方」の着地点を検討していく予定です。



平成26年度 仙南地区 緩和ケア講演会(市民公開講座)

平成26年12月6日 大河原町駅前コミュニティーセンター「オーガ」

仙南地区在宅ホスピスケア連絡会・宮城県仙南保健所・大河原町・当推進室の四者主催で「仙南地区緩和ケア講演会(市民公開講座)」を開催しました。

当日は、みやぎ県南中核病院の杉山克郎先生より「患者と考え、地域で支えるがん医療」を演題に、市民の皆さんにも大変わかりやすくご講演いただきました。続けて、大河原町の市民サークル「60歳からの楽しいクラブ活動」と在宅ホスピスケア連絡会の皆さんによる「もし、あなたや家族ががんと診断されたら」の寸劇が披露されました。寸劇のシナリオは、平成24年10月に登米地域在宅緩和ケア市民講座で実施した寸劇をもとに、市民目線で在宅緩和ケアに関する情報を問答する内容に練り上げられ

たものとなりました。寸劇の中では、実際に家族をがんで亡くされた市民が、在宅緩和ケアの必要性を自らの言葉で伝えられ、会場の参加者全員が改めて「どのようにして自分らしく最期を迎えるか」を考える貴重な機会となりました。



仙南地区緩和ケア講演会(市民公開講座)を開催して【感想】

有限会社ケイ 調剤薬局事業・介護事業 薬剤師 轡 義治 さん

『こんな時、貴女ならどう生きるの？母はこんな宿題を残して旅立って逝ったような気がします』

今回お世話になった劇団員の方の言葉である。半年余り仕事と看病を続け、自宅で母を看取られた。この言葉は私の心に響いた。今回とは、当地域の仙南地区在宅ホスピスケア連絡会での市民講座でがんに関する寸劇を行った時の事である。にわか団員として参加、これまでの概念は変わってしまった。脚本と一般市民の認識がかけ離れすぎている。在宅医療、がん終末期、化学療法、医療・介護保険等々の説明から始まった。そこから様相は一変、脚本は次々と書き換えられ劇団員の眼が輝く。演劇の練習半分、身近な問題としての討論半分。いつの間にか内容は市民目線になっていた。市民啓蒙の為に様々な事が行われてきたが、気づかぬうちに医療・介護者側の意見を一方的に発信するだけに？この人達だけが知らない訳ではない。家族ががんに

なった時、病院からこんな制度があることも伝えられなかった人もいる。これが一般社会の現実ではなかろうか。そんな思いが込み上げてきた。

当日本番、足元が震える。30分たらずのフィクション寸劇。しかし演ずる人達は自分の身近な問題としてがんと在宅医療をとらえ、ノンフィクションの迫力と情熱。私に感動と力を与えてくれた。人生は壮大なドラマにも例えられる。その最後の時まで有意義に、正に主役として生きる。主役は何も知らずには役を続けられない。家族や友人、名脇役も必要だろう。そしてそれを支える社会も。

WHOは公衆衛生を「組織された地域社会の努力を通じて、疾病を予防し、生命を延長し、身体的、精神的機能の増進を図る科学であり技術である」としている。多くの医療者に関する法(医師法や薬剤師法など)の第一条、「〇〇師は(中略)公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もって国民の健康な生活を確保するものとする」と規定している。言葉の重みを再認識させられる。

冒頭の文言を心に刻みつつ、多くの事を教え旅立たれた方々に感謝と畏敬の念を持って…合掌。

大河原町地域包括支援センター 主任介護支援専門員 白戸 佳子 さん

平成26年12月6日に平成26年度緩和ケア講演会(市民公開講座)が開催され、大河原町職員として、また、ホスピスケア連絡会のスタッフとして協力でき、とても光栄なことと感じております。

仙南地区在宅ホスピスケア連絡会は平成11年に県内の他地域に先駆けて、仙南地区のがん患者・家族の支援を目的に保健医療従事者が集まり、現在まで多職種連携しながら研修会や講演会を開催している歴史ある連絡会です。

今回は、みやぎ県南中核病院杉山克郎先生による講演「患者と考え、地域で支えるがん医療」と、大河原町の「60歳からの楽しいクラブ活動」のみなさまによる寸劇を企画し、当日は大河原町コミュニティーセンターの会場がいっぱいになるほど(約80名)の参加者で大盛況でした。杉山先生の講話の中で、「『少し前はがんになったら

痛みがひどく、最期は大変』との風評があり、がんの告知には慎重であった。しかし今は、告知することで治療方針を本人中心に家族と医師、コメディカル、介護スタッフと共に前向きに考えていく体制がとれるようになり、QOLが保たれたまま苦痛なく生活できるようになった。」というお話をお聞きし、「がん」という病気に対する恐怖心が和らいでいく思いがしました。さらに、「60歳からの楽しいクラブ活動」のみなさまによる寸劇では、住民の視点に立って「がん」という病気を目の当たりにした時の心境や現在の医療体制と併せて劇団員の体験談をわかりやすく伝えていただき、劇団員、会場の参加者、ホスピスケア連絡会の一体感のなか、講演会が大変充実したものとなりました。

今回は、住民主体で「がんサポートチーム」の力を発揮していくきっかけづくりとなる講演会になったことに感謝すると共に、これからもますます住民主体の講演会を企画できるように、ホスピスケア連絡会のスタッフと協力していきたいと思ひます。



がん患者支援のためのピアサポーター育成研修 (in 石巻)

平成26年12月9日, 16日

宮城県石巻合同庁舎仮設会議室

石巻赤十字病院・宮城県石巻保健所・当推進室の三者主催で、ピアサポーター育成研修を開催しました。今回は、定員20名のところ30名以上の申込みをいただき、受付させていただいた25名の皆さんが参加されました。2日目は雪のため悪天候であったにもかかわらず、ほとんどの皆さんが2日間にわたる研修課程を修了されました。

今回は、石巻地域のがん体験者とともに在宅療養支援者の皆さんにも多くご参加いただき、石巻地域のがん患者支援に対する意識の高さが伺えました。

研修では、「ピアサポーターの基礎的な知識とよりよいコミュニケーションを学ぶ」を目標に、講義と研修教材DVDの視聴、グループワークや模擬相談のロールプレイを行いました。アンケート結果からは、「相談中の沈黙は相談者が自分の考



えをまとめている時間だということに気づきました(がん体験者)」や「ロールプレイを行い、人の気持ちに寄り添うことの難しさを実感しました(支援者・ケアマネジャー)」などの感想をいただきました。併せて、「この研修会県内各地で行うべきだと感じています」という要望もいただき、ピアサポートの拡がりを少しずつ感じることができています。

ピアサポーター育成研修に参加して【感想】

ピア W.N さん

今回、サバイバーの立場で、研修に参加させていただきました。それは、ピアとして何かできることはないかという思いと、がんという病気に対する視野を広げるためです。

講義では実体験に基づいた四つの痛みの話が印象的でした。また、ワークショップやロールプレイでは実際に話したり役を演じたりすることで、受講者同士でピアサポートの意義やどんな対応の仕方が適切なのかと確認することができました。

ピアサポートの役割として、相談者に寄り添うことの重要性を強く感じました。その寄り添い方は様々で、相手のニーズに応じた支援は何通りかあるのだと思いますし、正解はないように思えます。また、私たちは相談されたら何か答えなくてはならないという気持ちになりがちで

すが、必ずしもそうではないということを改めて学びました。相談者のどうしていいかわからない不安な気持ちを受け止めるといった意味では、沈黙も大切な時間なのですね。沈黙は気持ちを整理したり、立場をわかる人にそばにいてほしいという願いのもとに時間や場所を共有したりする大事な間合いなのだと思います。私もかつてそのようなことがあったのを記憶しております。ですから、ピアサポーター自身も、もう一度自分の生活を振り返り、さらにその時々自分の気持ちを受け止めたうえで、相談者が悩んでいることへの解決の糸口を一緒に考えていければ良いと思います。そのためには、私たちはハード面でもソフト面においても配慮した環境づくりを心がけることも必要です。

今回学んだ事をふまえて「思いを言葉にする」「思いと同じ場所で過ごす」ことに勇気をもったピアの力になれるようなサポートを心がけていきたいと思っています。

編集後記

COP通信をご覧頂き、ありがとうございます。

当推進室の活動が開始してから間もなく3年を迎えようとしています。本当にたくさんの関係機関・関係者の皆様や患者さん方にご支援とご協力をいただけていることに心より感謝申し上げます。推進室では毎日のように「ありがたいですね。」と会話しておりますが、これからも感謝の気持ちを忘れずに、皆様と共にがん患者支援活動に取り組んでいきたいと思ひます。

(保健師：真溪淳子)



【発行元】

東北大学病院がんセンター
先進包括的がん医療推進室

〒980-8574 宮城県仙台市青葉区星陵町1-1
Tel: 022-717-8885 (直通) Fax: 022-717-8886
E-mail: cancercenter@hosp.tohoku.ac.jp

【編集委員】 真溪淳子／吉田久美子／高橋恭子